

一、室鳩巢諷時事詩

二月廿三日先生集書の内
尾州の憲令拙子方にては未取出候所に、彌四郎殿御取出被成、其元へも被遣御覽候由一段の儀、娼肆戲場城下に出来候事は無紛儀に候。其故名越殊の外繁昌仕候由、當地にても其のみ取沙汰仕候。就其別紙絶句書付進候。

聞時事有感三首

明德新民本一源。祇須以正率黎元。國家莫若淫風害。放遠鄭聲是聖言。

娼歌童舞各開場。一國奔歸人若狂。何用豪華誇富庶。亂風敗俗可悲傷。

號令區々何足陳。不知君德在修身。空聞虛譽喧隣境。非是實功及國人。

右三首伊勢山田鈴木貞齋へ示し申候。貞齋去々年治道管見と申物筆記いたし、老夫に序を乞申候故、當春調遣申候。序文は長候故此度進不申候。其序文の末に餘幅有之候故、治道管見を讀の詩二首と、右の三首を附録仕遣申候。

讀貞齋治道管見二首

以孝廉備計卒於燕。仕卿少深沈有智數。而長於籌畫。居常好風雅云云。

余答書云。

玄祖二字、近年俗間五代祖の稱謂に仕來候得共、終に見覺不申文字に付、直に無稽の言と存じ深く考案にも不及罷在候。水明樓集に出申儀初て致承知候。此間唐話纂要と申俗書有之、致一覽候所に、玄祖の二字を出し高祖の事といたし、唐晉迄も付置候。契丈思召の通り、明季の俗稱より出申事と存候。樓集には五世の祖の事とし、纂要には高祖の事と仕候。共に難據候。内高祖の稱に仕候事は、少しは意義も有之様に存候。上四世の祖、下四代の孫、共に玄を以稱し候はいはゞ少し據も有之か、畢竟俗間の謬傳にて難用事と存候。以上。

三月盡

俊 新

一、冷眼・冷笑の義

冷眼。冷笑。張景安中秋詩、四時此月曾無別。人自今宵冷眼看黃濟敗荷詩。鶯鶯一段榮枯事、都在沙鷗冷眼中。夏竦藏歌詩。主人端坐無由見。會被旁人冷眼看。

一世釜鳴曲學徒。東西到處稱鉅儒。君看搯腕談王霸。恐似儀泰誤丈夫。

正學不明知幾年。近來邪說最紛然。吾黨獨有貞齋在。感子處窮志益堅。

駿臺病叟

一、玄祖の語の有無

高祖の父は五世祖に御座候。去年伊藤内膳由緒帳に五世祖と記被申候所、奥村内記殿より玄祖父と被改候。玄祖父と申事は爾雅・儀禮・家禮等に見え不申かと申候所、内記殿家來中考出の由にて、別紙の通内記殿より爲御見候。私返答には水明樓集に玄祖と出候へば、明季世俗に稱し申と相見候。初て玄祖の文字見及候。乍然經傳慥成書に見當不申候へば、急度仕たる事に難用様に存候由申遣候。玄祖と申字、慥成書に御見覺被成候はば、被仰聞可被下候。以上。

三月晦

中泉一學 愿宇

水明樓集卷十二從子仕卿傳

仕卿名公選。余五從子也。玄祖叔紹官憲副。高祖煥學孝廉不拜官。隱棲雲山以詩名。則仕卿所向往者也。曾祖墳亦

冷眼は物をうけがはずして見る目づかひ也。又はさまざま見ると云説あれどもあしし。今初て逢たものなどのやうに、隔心にして見る意なり。後撰集歌に

月影は同じひかりの秋の夜に分けてみゆるは心なりけり

この意なり。今按格別に改て看る意。崔魯が詩に、獨立空山冷笑春。李白上李邕詩。聞余大言皆冷笑。冷笑はにがわらひと訓す。又あざわらふと訓す。

一、甘露の詩の儀室鳩巢來狀

三月廿三日來狀の内

甘露の事被仰下候。當地先頃は其沙汰のみに御座候。林家はじめ世儒の詩にも、是を申さぬは無之候。初中後象と甘露の事詩に作り不申者は、儒生には老夫一人に御座候。甘露の事彌嘉瑞に極候や、不知案内に御座候。故に賦し可申了簡も無之候。去冬以來春に至て寒氣強く、國々深雪の由、此極和暖に罷成山々の雪消候故、道中川々水出候て大名衆はじめ行旅逗留難儀の由承候。尾州にも御逗留候て、頃日御着府候由承候。以上。

一、尾張宗春侯の儀等室鳩巢來狀

五月廿三日御手書の内

尾州の憲令一覽以後、貞齋へ遣候詩共相達、御覽被成候由承